

平成五年九月七日宣告 裁判所書記官板坂 肇

平成四年(う)第五二号

判 決

本籍 金沢市東力二丁目二八番地二

住居 同 東力二丁目二八番地の二 犀畔荘一号室

自動車運転手

廣 野 秀 樹

昭和三九年一月二六日生

右の者に対する傷害、準強姦被告事件について、平成四年八月三日金沢地方裁判所が言い渡した判決に対し、被告人から控訴の申立があったので、当裁判所は、檢察官松浦由記夫出席のうえ審理し、次のとおり判決する。

主 文

本件控訴を棄却する。

当審における未決勾留日数中三〇〇日を原判決の刑に算入する。

理 由

一 本件控訴の趣意は、弁護人木梨松嗣作成の控訴趣意書及び控訴趣意補充書並びに被告人作成の控訴趣意書に記載されたとおりであるから、これらを引用する。

二 控訴趣意中、事実誤認の主張について

1 被告人は、本件準強姦の事実につき、姦淫の際、被害者安藤文は被告人の問い掛けに即答しており、その後、被告人が同女を連れて警察署に出頭したときにも、同女は刑事の質問に対して返答していたもので、同女は本件時、抗拒不能の状態ではなく、被告人の姦淫行為につき同女は暗黙の了解をしていたもの

であると主張し、弁護人は、被告人には被害者が意識朦朧の状態となり抗拒不能であったとの認識がなく、被告人は準強姦の故意を欠くと主張し、いずれも、準強姦罪の成立を争っている。



所論にかんがみ、記録を調査し、当審における事実取調べの結果をも参酌して検討するに、被告人は、捜査段階及び原審公判廷において、原判示第一の被告人の傷害行為によって被害者は路上に仰向けに倒れ、苦しそうな顔つきとなり、苦しそうな息をし、倒れたまま動かず、被告人が同女を抱きかかえて軽四輪自動車の助手席シートを倒してそこに寝かし、その後、被害者が被告人の暴行により怪我をしてまいつている状態で抵抗できないので、姦淫しようと思えばやれると考えて姦淫を決意した、姦淫時には、被害者はあいかわらず横になってぐったりしており、何もしゃべらず、ただ、「嫌。」と三回位言^{つた}が、体

を動かして抵抗する力はなく、寝たままじっとしていた旨を供述して本件準強姦の犯行を認めていたものであって、右各供述は、被害者の受傷の内容・程度、被告人が、右傷害の犯行後、被害者を病院に連れていかなければならないと判断し、さらに本件準強姦の犯行後に金沢西警察署に自首し、被害者の病院への搬送を依頼していることから十分信用できるものであって、信用性を疑わしめる事情は窺えない。被告人の準強姦の故意に欠けるところはない。論旨は理由がない。

2 弁護人は、被告人は、精神的に未熟で、思考の固執性・自己中心性を有する性格であり、特に、女性に対し異常な思い込みをする性格であるが、そこに被害妄想があったことから、他人の言動をより一層被害的に受け取り、極度の精神的興奮状態に陥ったことから本件各犯行を惹起したもので、本件各犯行時、

心神喪失または耗弱の状態にあったと主張する。

所論にかんがみ、記録を調査し、当審における事実取調べの結果をも参酌して検討するに、被告人は捜査段階及び原審公判廷において詳細に本件各犯行の経緯、動機、態様、犯行後の行動等について供述しており、右供述は十分信用できるものであるところ、以上の各供述によると各犯行の場面の被告人の行動は一応了解可能であり、本件各犯行時、被告人には意識障害はないこと、さらに鑑定人山口成良作成の鑑定書及び同人の当公判廷における供述によれば、被告人の本件各犯行は、爆発型の精神病質人格の傾向を有する被告人の性格特徴を背景にした、爆発反応ないし人格反応によりなされたものであって、爆発型の精神病質人格の傾向を有するという被告人の性格特徴については、明らかに精神病患者とは異なるものであること、被告人に関して精神薄弱等の症状が合併



する等の特別の事情はないことなどの各事実が認められ、右によると、被告人は本件各犯行時、精神の障害により事物の理非善悪を弁別する能力又はその弁別に従って行動する能力が欠如または著しく減退した状態ではなく、完全な責任能力を有していたことが明らかである（なお、被告人は、原判決後、当審における弁護人に対して、多数の手紙を発信し、その内容中には本件各犯行時、被告人が精神的に不安定であったことを回想し、また、本件が被告人の勤務していた会社の関係者の圧力により惹起されたものである旨の記載があるが、それは、被告人が自己の責任を他人に転嫁しようとする自己中心的な本人の性格傾向に基づく、人格反応と認められるものであって、前記責任能力の判断に影響を及ぼさない）。

三 控訴趣意中、量刑不当の主張について

所論にかんがみ、記録を調査し、当審における事実取調べの結果をも参酌して検討するに、原判決が量刑の理由で判示するところは肯認できるものである。すなわち、本件は、被告人の交際の申込みに応じなかった、被告人と同じ職場の全く落ち度のない当時二一歳の未婚の女性に対し、一方的に過激な暴行を加えて、全治期間不明の頭蓋骨骨折等の重篤な傷害を負わせ、それにより抗拒不能の状態にあった同女を姦淫したもので、危険で悪質な犯行であること、何ら被害者に対し慰謝の措置が取られておらず、被害者の親族の被害感情は極めて厳しいことなどに鑑みると被告人の刑事責任は重大であって（当審においては、会社の関係者に本件の責任を転嫁して、事実関係まで否認するに至るなど反省の態度は不十分である）、弁護士指摘の、被害者に対しては一応反省しており、自責の念がうかがえること、被害者の症状は、現在、リハビリテーションを受ける程度にまで回

復していること、被告人の家庭状況等を考慮しても懲役四年を科した原判決は相当であつて、論旨は理由がない。

四 よつて、刑訴法三九六条により本件控訴を棄却し、刑法二一条を適用して当審における未決勾留日数中三〇〇日を原判決の刑に算入し、当審における訴訟費用は、刑訴法一八一条一項ただし書を適用して被告人に負担させないこととして、主文のとおり判決する。

平成五年九月七日

名古屋高等裁判所金沢支部第二部

裁判長裁判官

小島裕史



18



裁判官

横田 勝年



裁判官

松尾 昭彦





1. *Phragmites* spp.
2. *Phragmites* spp.
3. *Phragmites* spp.

